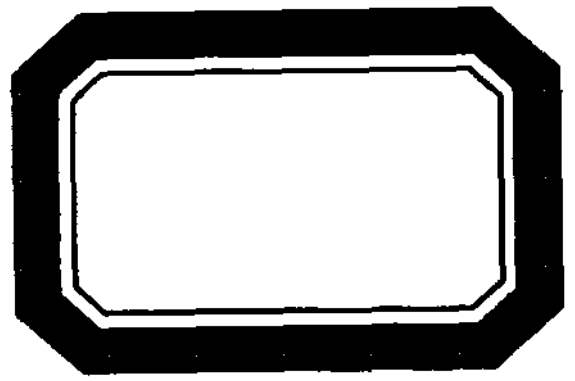


たけなす

小松重男



新潮文庫



やっところ侍さむらい

新潮文庫

こ-18-5



平成五年三月二十五日発行

著者 小松重男こまつ しげお

発行者 佐藤亮一さとう しょういち

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 営業部(〇三)三三六六―五一一

編集部(〇三)三三六六―五四四〇

振替 東京四―八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Shigeo Komatsu 1993 Printed in Japan

ISBN4-10-148705-7 C0193

月文庫

やっところ侍

小松重男著



新潮社版

5026

目次

やっところ侍	七
三毛猫侍	四五
ぺつぽつ侍	七
田沼恋しき	一五
おとぼけ侍	一五
足軽殿様	一八
耳切り剣法	二三

解説 縄田一男

や
つ
と
こ
侍

や
つ
と
こ
侍

—

俊太郎しゅんたろうが七歳になったばかりの正月だった。

寝るとき枕まくらにたのんだ甲斐かいがあつて、まだ暗いうちに目がさめたとび起きて家中を探したが、もう父の姿はなかった。

— やつぱりおつかさんにたのんでおいて、起こしてもらえばよかつたんだ。べそをかいていると母が察してくれた。

「まだ信松院の境内にいなさるかもしれないよ」

おもてへ飛び出したら、しらしらと夜が明けかかっていた。

一目散に走った。

— 間に合った。

寺の境内には旅仕度の人がおおぜい集まっていた。

— おや。

旅仕度の人たちは、みんな長い棒を持っている。父も持っていた。

— なぜ棒なんぞ……。

近寄つて、しげしげと眺ながめたら、なんと長い棒に見えたのは槍やりだった。おまけに、みんな

刀を二本差している。

——まるでお侍さんみたようじゃあないか。

ちかぢか父が近所のおじさんたちといっしょに日光という所へ働きに行く、ということは母に聞かされていた。

しかし、こんな恰好かっこうで出掛けるとは少しも知らなかった。

「井上十兵衛。六郷金之助。早川兵五郎。……」

侍
こ
と
と
や
っ
と
父は帳面を見ながらおじさんたちの名前を呼び上げて、つぎつぎ二列に並ばせている。どうやら行列をつくって出掛けるらしい。

まもなく信松院の鐘が明け六つの時を告げ始めると、行列は父を先頭にして動き出した。

「おとつつあん」

そばへ駆け寄ったら、父は笑って、

「よう起きられたな」

と言ったきり、もう振り向いてもくれない。俊太郎は、なぜそんな恰好をして行くのか、と訊ききたくて、しばらく小走りに付いて歩いたけれども、なんだか父に叱しかられそうな気がしてきたので、あきらめた。

——百姓がお侍さんみたように刀を二本も差しているばかりか長い槍なんぞ担かいで……。道中、役人に咎とがめられやしないか、と心配になったので、そのことを母に尋ねた。

「咎められやしないよ。だって、みんな本物のお侍さんなんだもの」

「まさか」

俊太郎は、てっきり母が冗談を言ったのだと思った。ふざけないで教えてくれ、とたのんだ。

「みんな、いつだって畑仕事や、お蚕かいこの世話ばかりしてるじゃないか、うちとおんなじに」

「おやおや」

と母はあきれ顔で言った。

侍
こ
と
「おまえ、ほんとうに知らなかったのかい」

いままで何も教えてくれなかったくせに、ほんとうに知らなかったのかいもないもんだ、と思ったが、いまは文句を付けている場合でない。ちよつとでも早く知りたくて、どうか教えてください、とていねいにたのんだ。

「ふーん。まだ教えてなかったかねえ。こないだ日光へ働きに行きなさるって話したとき教えたつもりだけど……。じゃあ、なぜ本物のお侍なのか教える前に訊くけど、おまえ、あたしらの檀那寺だんなでらが、なぜ信松院って名前なのかは知ってるだろう」

「うん。それは……」

俊太郎は、むかし武田信玄という偉い武將に松姫という美しいお姫ひめさまがいたけれども武

田勢が戦に負けたので尼さんになってしまい、お名前を信松尼って変えた、その信松尼が亡くなるまで住んでいた庵の跡へ建てた寺だから信松院っていうのだ、と謂われを述べた。「そのとおり」

母は、いつか教えてやったことを能く憶えている、と褒めてくれた。

「武田が滅びたとき、松姫さまのお供をして来た同心衆や、お慕いして集まって来た家来たち、このあたりに住み付いたんだってさ。その人たちが、あたしらのご先祖さまなんだよ」

俊太郎は、なるほど、と思つて頷いた。

「やがて、ご先祖さまたちは、いまの公方様の御先祖様の徳川家康とおっしゃる御方に召し抱えられて、『八王子槍組千人同心』って呼ばれるようになったんだよ」

以下は母の詳しい説明である。

——八王子槍組千人同心は百人ずつ十組に編成されて、関ヶ原の戦い、大坂冬の陣、大坂夏の陣でたいそう手柄を立てた。そののちも徳川將軍の親衛隊として、家康、秀忠、家光の道中警衛に重用されたが、ようやく太平の世になるにしたがつて、もはや將軍自身が長途の旅をすることもなくなり、いつのころからか、わずかに一組ずつ一年交替で、ただ日光山の火事警戒だけ仰せ付かっている。ぜんぶで十組だから、それぞれの組に番が巡ってくるのは十年目だ。そのあいだの九年間は役目らしい役目は何ひとつ与えられない。もともと御扶持

が少ないので、みんな百姓仕事を副業にして暮らしを立てていたのだが、いまは本業同然になつてしまつた。

「そうだったのかあ」

俊太郎が、なんだか情け無いようなお侍なんだね、と言つたら、とんでもない、と母は手を振つた。

「その家の主が一生のうちに合わせて二年か三年、とんと猫が飛び付きそうな槍を担いで、てくてく日光へ行つて一年のあいだ火の番をして来さえすれば、ちゃんと御扶持を頂戴できるんだから、けっこうなお侍さね」

俊太郎は怪訝な顔付きで、猫が飛び付きそうな……、つてどういう意味か、と質した。

「先に赤鯛が付いているからさ」

「赤鯛って……」

「赤錆だらけで切れない刃物のこと」

「あつ、そうか」

——なるほど、ときどき行商人が売りに来る塩漬の鯛は錆びた庖丁とそっくりの色をしている。

おじさんたちが腰に差していた刀も赤鯛か、と俊太郎は母に訊いた。

「だろうね。うちの刀もそうだから」

「うちのはいったいどこに置いてあったの」

「おまえたちが遊び道具にすると危ないから葛籠つづらへ……」

どこの家でも非番の九年間は古葛籠の底へ仕舞って置くのだそうだ。

「まいにち百姓仕事しなければ暮らしてゆかれない侍って言うて情け無いけれど、たとい少しでも御扶持を頂戴している格別に偉い百姓だと思えば……」

情け無いどころか誇らしいぐらいなもの、と言つて母は話をしめくり、うちは先祖代々組頭くみがしらを勤める家柄だから、なみの同心衆より余計に御扶持を頂戴している、ということも付け加えた。

侍
こ
と
と
「おつかさん。じゃあ、おれも……」

や
っ
そのうち、おとつあんのように百人も同心衆を引き連れて日光へ行くのか、と俊太郎が念を押したら、母は笑つて、みんなに背そむかれると困るから、せいぜい同心衆の跡取り息子たちと仲良しになつておけ、と言つた。

二

俊太郎は、さつそく近所の遊び友だちに、そのことを言つた。

「なんだ。俊ちゃんは知らなかつたのかい」

うれしいことに、友だちはみんな自分の父親や祖父が八王子槍組千人同心だということを知っていた。

跡取り息子は無論、次男坊、三男坊の友だちも、いずれ男の子がいない家へ婿養子に行つて千人同心になるのだ、と言つた。

「おれたちはみんな、おとなになつたら槍を担いで日光へ行くんだぜ」

どの子も、その日を楽しみにしている様子なのに、たった一人だけ、日光山の火の番なんぞつまらない役目だ、とけちをつける子がいた。その子は俊太郎より三歳ほど年上なのだが、とつぜん、とんでもないことを口にした。

侍
と
こ
「おい、俊太郎。おまえは組頭だからな、もしも日光でおれっち組下の者がおなごをて、ごめにすると、おまえは腹を切らされるんだぞ」

や
っ
俊太郎は、びっくりして、て、ごめにするという言葉の意味を質した。

「ちえっ、知らねえのかよ。て、ごめにするつてのはな、おなごをいじめることだ」

「ふーん。日光へ行つてるときに、だれか組下の人がおなごをいじめると、組頭が腹を切らされるのか」

「そうだ。ほかの組だけど、ほんとうに腹を切らされた組頭がいたんだぞ」

この子は、つい最近ばあさまに聞いたことだから嘘じゃあない、と胸を張つた。ほかの子たちも、そのことは親に聞いて知つてゐる、と口々に言つた。

「……………」

俊太郎は愕然がくぜんとした。

——このあたりには女の子をいじめる男の子がおおぜいいる。

現に、いま教えてくれた年上の子が女の子をいじめの常習者だった。まだ女の子をいじめる子は数え切れないほど多い。いつも優しくしているのは自分一人、と言ってもいいほどだ。

——どうしよう。

俊太郎が、わが身の先行きを案じていると、

「おい。おまえの顔が白くなつたぞ。おとなになつて腹を切らされるのが怖いんだろう」

その子に凶星を指されてしまった。

「……………」

俊太郎は、すごすご家へ逃げ帰り、これこれしかじかのことを聞いたけれどほんとうか、と母に尋ねた。

「いやなことを聞いて来たねえ。そりゃあ、たしかに、むかし、そんなこともあつたそうだけれど……………」

けさ出掛けて行つた鷹取組たかとりの人たちは、みんな組頭の言うことをよく聞いて、そんな悪さなんぞ金輪際しない人ばかりだから、けっして父の身を案じることはない、と母が慰めてくれた。